

地域学校づくりの教育課程

—生活科・総合学習を柱にして—

徳山 久美子（高松市教育文化研究所）

Ⅰ 地域学校づくりへの展望

これからの教育改革の視点として、「個性重視の原則」及び「変化への対応」とともに「生涯学習体系への移行」があげられる。それは、社会の変化に主体的に対応し、活力ある社会を築いていくためには、今までの学校中心の考え方を改め、生涯学習体系への移行を主軸とする教育体系の再編成が課題であることを示唆する。学校経営改善の指針とする。

1 教育課題を明確にした学校づくり

臨教審の答申は、「学校がいきいきとして活力に満ちあふれているためには、個性重視の原則、個性の尊重、自由・自律、自己責任の原則が学校教育の中に確立されていなければならない。」と問いかける。

ここにいう個性とは、個人の個性のみならず、家庭、学校、地域、文化、時代の個性をも意味しているととらえる。ここでは、個人、組織、団体、機関のそれぞれが、自己に期待された役割を自己の責任と判断によって実現することが重要だとする認識が前提にあると考える。学校もまた、管理・運営に当たっては、自らの学校の個性を大切にするとともに、個性をつくりだそうとする意欲や考え方づくりの重視が経営上の課題となる。

今までの学校は、職務の専門性から、各教師の職務遂行における自律の重要性が論じられてきたが、これからは、教科の専門性などを基軸にすえながらも、組織としての自己責任の実現という視点から、自律的学校経営への見直しを図るべきだととらえる。

つまり、今、求められているのは、学校の個性を大切にしたい学校づくりである。子ども一人一人の願い、保護者の期待、地域の人々の願い、教師の願いなどを基本的視座におき、学校教育課題を明確にして、学校の独自性と主体性を生かす教育課程の再編成に取り組む。

2 地域に生きる学校づくり

(1) 学校自体を開く

現代の学校は、児童生徒の年齢を基準にした学年と学級を単位として組織されている。その学習内容は、教科・道徳・特別活動の三領域を中核として構造化されている。学校とは、児童生徒、教科、時間、空間などの組み合わせによって成立している地域社会ともいえる。まずは、学校自体が開かれた地域性を備えていくことが、新しい地域学校づくりへの第一歩ではないかと考える。

具体的には、教科間や、領域間などの枠を超えて学習を展開したり、時間の運用を弾力化したり、チーム・ティーチングを実施してみるなど、個性化や弾力化への課題は多い。今まで、点として試みてきた様々な実践を面として統合し、学校経営を教育課程経営に高めることを命題として実践を試みる。

(2) 学校を地域に開く

これまでの学校教育は、学校という空間の中で自己完結的に実践されてきた傾向が強い。学校を開かれたものにするには、まず、周りの地域自体を学習の場として見直していく。学校が地域社会を活用し、地域社会も学校を活用することを通じて開かれていくのではあるまいか。こうした交流が地域の教育力の回復につながる。子どもにかかわる学校・家庭・地域など複数の学習場面による相互の支持的連結の強さが子どもの成長発達を支える大きな力になると考える。

学校経営への発想を柔軟にして、新しい学びとふれあいのある地域社会が形成されていくよう、学校教育と学校外教育の連携を見直し、学校週5日制完全実施に向けての積極的な対応策を組む。

(3) 「地域に学ぶこと」のよさを体験する。－文化発信社会に向けて－

地方の時代の到来は、地域に個性ある文化を育て、発信していこうとする気運を高める。豊かな文化を個人から、地域から発信し、相互の交流を通じて新たな文化創造を目指す子どもを育てていきたい。平成6年度の「文教施策」を参照する。

「文化発信社会」の視点づくり

文化の創造的活動を活発にする「創る」という視点
文化財や伝統芸能など、価値の高いものを「守る」という視点
地域文化や生活文化を「楽しむ」という視点
文化に携わる人、特に若手の後継者を「育てる」という視点
文化を地域から、国際的にも「発信していく」という視点

地域の風土や生活から人間に語りかけるものは、数多く存在する。豊かな自然、人々の日々の営み、先人の有形無形の文化的遺産など、それぞれに学習材としての価値を見いだすことができる。「ふるさと学習」は地域社会と自己とのかかわりに気づき、改めて自己の在り方を問い直すよい機会である。

(4) 文化的活動の学習拠点とする

前述した開かれた学校づくりに向けて、学校のもつ諸機能の見直しが必要ではないか。例えば、日常の授業やクラブ活動の成果発表として、詩・絵画・工作などの展示や音楽発表会を学習の一環として行い、子どもの文化的成長の様子を地域の人々に見てもらう場を多くする。現行の学校行事を見直して発表機能を生かす場を工夫するわけである。あるいは、子どもと大人で調査を試みた地域の歴史、芸能、産業などに関する情報や資料を公開していく情報機能を重視していく。さらに、地域文化や暮らしに関する研究機能を深めて、時にはその成果を子どもや親の視点から地域活性化への意見としていく提言機能に結びつけていくことは生きた学習になると考える。これらの学習を、異なる学校と協力して実践すれば、学校を媒体とした異文化交流の機能に広げることができる。

つまり、学校を教育機関としてのみとらえるのではなく、地域文化の学習拠点としても位置付けていく教育課程の編成を志向する。

3 教育課題の設定と研究の方向付け

「地域学校づくりの教育課程」を生活科の見直しと総合学習の展開に求めて研究を進める。学校週5日制の完全実施を視野に入れた研究の概要は次の通りである。

- 開かれた学校（地域学校）の基本視座を設定する
 - ・ 子どもに開く 生涯にわたる学びの場づくり
 - ・ 地域に開く 地域に開く学校づくり
 - ・ 未来に開く 新しいライフスタイルづくり
- 開かれた教育課程の編成をすすめる
 - ・ 教科・領域の枠をゆるやかに、教科・領域間の連携を緊密に
総合学習の導入 教科等統合のすすめ
 - ・ 生活科の再構築と「地域学校プランの作成」
- 「生きる力を育む」学習活動の開発を工夫する
 - ・ 主体性、感性、創造性、共存の意識を大切にする学習づくり
 - ・ 自己開発型、学習創造型の授業づくり ・ 課題設定学習、課題選択学習の試み
- 学校・家庭・地域連携のカリキュラムづくりをすすめる
 - ・ 学校教育と学校外教育の融合
 - ・ 生活体験、社会体験、自然体験、文化体験等の場づくり

II 地域学校づくりの構想

1 特色ある教育課程の編成 —総合学習の展開に向けて—

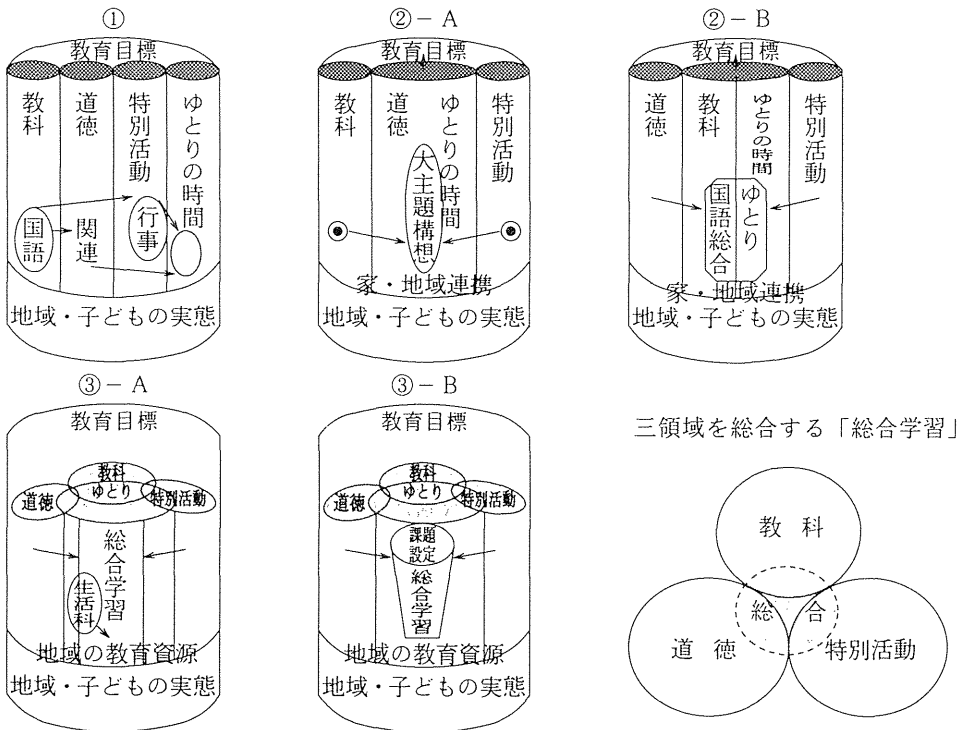
地域学校として、「開かれた学校づくり」を推進するためには、どのような教育課程を編成すべきであろうか。

新しい学力観に立つ学習指導は、子どもの思いや願いに基づいて、子ども一人一人のよさや可能性を生かしながら、新しい課題に進んでかわり、自ら考えたり、判断したり、試みたり、表現したりする学習を基軸にして展開される。

そのためには、従来の教育観の転換が課題である。今までは、教科中心であり、教科間や領域間の関連については、あまり配慮されてはいなかったのが実状である。学習の場で培われた論理的思考力、想像力、直感力など創造性の基礎となる能力を働かせつつ、豊かな感性や社会性などを育てる教育課程の編成がいそがれる。改めて、教科等で培った力を積極的に総合する編成を開発しなければ、地域の学校としての主体性は確保されないと考える。

本校では、次の図の「教育課程編成のタイプ」③-A・Bについて実践を試みる。

【教育課程編成のタイプ】



学校経営の個性を総合学習づくりに求める。三領域を総合する課題と体験の軸をいかに設定するかで教育課程経営の方向付けがなされる。本校では、地域の自然や社会・文化などに課題や体験を求めていく。すなわち、教育課程の中心に「総合学習（ふるさと活動）」を位置付けて、全体構想の見直しを進める。

この教育課程の編成に当たっては、高松大学池内博教授の指導を受け、実践する。

2 生活科から総合学習へ

(1) 生活科再構築の視点

① 「新しい学力観に立つ教育」から

新しい学力観に立つ教育では、子どもが主体的に生きていくことのできる資質や能力の育成を目指している。すなわち、基礎的・基本的な知識、技能とともに思考力、選択力、表現力など、これらの基礎のうえに、創造性豊かな個性や社会性を身に付けることをもって学力と考える。つまり、学習者である子ども一人一人が、自らすすんで考えたり行動したりできる力や豊かな思いやりの心を培うことが求められている。

生活科の特色の一つは、「自分の身近な環境とのかかわりを広げ深める力」の育成にある。そのためには、学習の場を学校外に広げて、子どもがもつ多様な課題意識に対応できる選択のある学習の展開が求められる。「自分で選んだ」「自分で調べた」「自分の考えをまとめた」という子どもの側に立つ展開は学校教育の質的な転換をもたらしてくれる。一人一人のよさや可能性を生かす学習の過程で、豊かな「知恵と感性」を培っていく。

② 「特色ある教育課程の編成」から

学習指導要領に基づく教育課程には、一人一人の子どもの個性、発達課題・学習ニーズに応じていく教育課程が求められている。自ら考え、生き生きと行動するための教育課程は、子どもが自らの力で疑問や問題を調べ、解いていこうとする考え方や方法が浮かんでくるような学習ができる性質のものである。それと同時に、現在の教育課程の編成が、教科・道徳・特別活動のそれぞれ個々に編成されていることを改善し、三領域を統合する柱となる教育活動を創造し、その学校の特色ある教育課程を編成することが求められている。

そこで、教育課程の柱として「総合学習」を位置付け研究していくこととした。この総合学習により、「課題解決型の思考方法や行動の仕方」を学習でき、「自ら学ぶ力」が身に付いていくと考え、実践の方向付けとする。

③ 「生活科を総合学習の中に位置付ける」ことから

教育課程の三領域を統合し、教育活動の柱となる主題として、「ふるさと活動（総合学習）」を位置付けたわけであるが、この場合、生活科と総合学習との関連はどう考えればよいか課題である。

生活科が、活動・体験・表現を重視する特性をもつことと同じように、総合学習も活動・

体験・表現を重視することからして、互いに共通性をもつこと。その上、生活科も、総合学習も、「地域を学習材」にすることの共通性をもてば、生活科を総合学習の中に位置付け、全学年共通な課題意識のもとに活動が展開されると考える。

このような考え方に立って、生活科の内容のうち、「地域を学習材」にする内容について、「ふるさと活動（総合学習）」の中に位置付けることとした。つまり、地域を学習材としない他の内容の学習と2つのタイプで、生活科の単元を構築したわけである。そして、前者を、「地域シリーズ学習」と名付け、地域意識・自然意識の連続性を重視する連続単元とした。また、後者を、「テーマ学習」と名付け、価値ある学習材による単独的な課題単元とした。

④ 「生活科を中心とした合科的取り扱い」から

生活科を総合学習の中に位置付け、生活科中心の合科的扱いによる生活科の再構築をしていきたいと考える。生活科を核にした合科的取り扱いの構想としては、生活科の中に、国語、図工、音楽、体育などの教科のねらいや内容を取り入れ、生活科中心の合科的扱いによって、豊かな学力形成を一層深めるべく年間指導計画案を作成する。

また、合科的取り扱いを行うに当たっては、生活科の時間数を確保し、より充実した生活科の学習展開ができるよう工夫した。すなわち、生活科の実数時間として、生活科の標準時間数（3時間）、合科として取り扱う他教科の時間数（1時間）、ゆとりの時間（1時間）の5時間とした。

3 「ふるさと活動」の展開

前述した生活科再構築の主張点を整理したのが、次の表である。

新設教科である生活科は体験・表現などの活動を重視し、学習を生活の場に展開する。生活の場とは、地域であり、共同体としての「ふるさと」である。生活科の実践を通して学校を地域に開き、その理念を全教育活動に広げていくことを学校経営の柱とする。

古高松小教育課程編成の特色を、地域に学び、地域を愛し、郷土を愛する子どもの育成におくこととし、これを「ふるさと活動」と呼ぶ。生活科と総合学習の一貫性を、この「ふるさと活動」に求めて、その関連付けと発展を意図したわけである。

そして、地域を素材とした価値ある学習材を開発し、子どもの自立を目指し、個性を生かしつつ、自らの課題を解決していく生活科・総合学習を学年系列の中で組み立てたのが次の構想図である。

<生活科・総合学習の構想図>

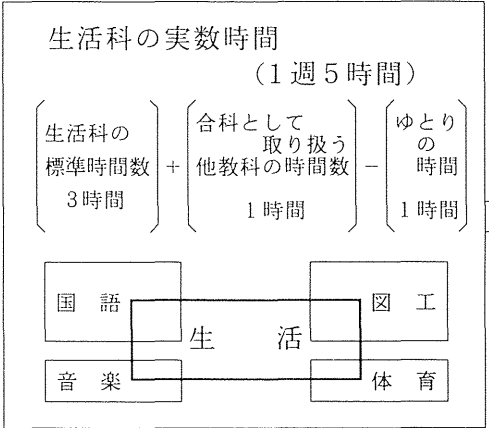
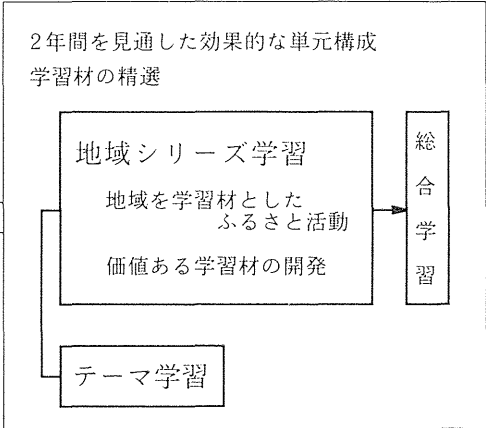
生活科の再構築を目指して

- ① 生活科を総合学習の中に位置づけ
- ② 生活科中心の合科学習としてとらえる

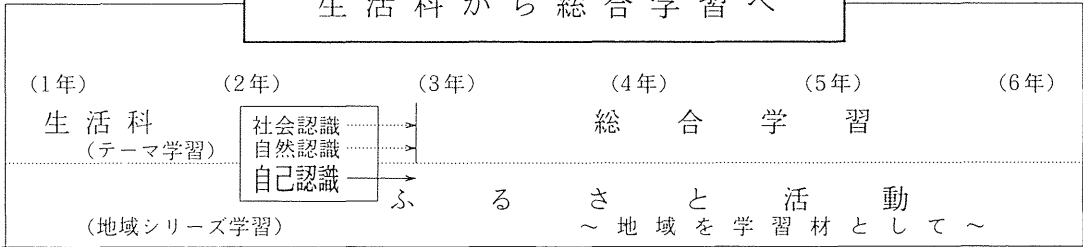
- ③ 地域を素材とした価値ある学習材を開発し
- ④ 子どもの自立を目指し、個を生かす教育に取り組む

<主張点1>
生活科単元の精選
～価値ある学習材の開発による
単元構成の工夫～

<主張点2>
生活科を中心とした
合科的取り扱い



生活科から総合学習へ



【ふるさと活動の展開】

情報	自然	ふるさと	国際化	伝統文化			
		◎		○	6年 地域を学習材にした「ふるさと活動」	郷土史探訪	関 連 合 科
○		◎		○		ふるさとの食文化	
	○	◎				ふるさとの水	
	○	◎				ふるさとの川 相引川	
テーマ学習						地域を 探検しよう	
テーマ学習						学校や公園で 遊ぼう	

Ⅲ 地域学校づくりの推進

実践紹介 3年 「キラキラいきいき古高松」

ーわたしたちのふるさとの川・相引川ー (30時間)

総合学習と他領域との関連

月	教 科	総 合 学 習	特別活動 (学校行事・学級活動)・道徳
			特 活 ・ 学 業
4	社会：学校のまわりを探検しよう(5) 古高松校区を意欲的に探検し、気づいた特徴を表現的に表すことができる。	「キラキラいきいき古高松」 ～わたしたちのふるさとの川・相引川～ ・ きれいでみんなの楽しめる10年後の相引川の模型をつくろう。	学行：遠足(6) 自分たちの興味に合わせてグループごとにコースを決め、春の古高松を探索しながら目的地を目指す。
5		・ きれいでみんなの楽しめる10年後の相引川の模型を作る計画を立てる。 ・ 夢の相引川を絵と文で表す。	
6	社会：美しい町をつくる(1) 昔の相引川の様子を地域の人から話を聞き、川の汚れの原因をとらえることができる。	・ 地域の人の話を聞いて、夢の相引川のイメージをふくらませ、設計図につけたす。 ・ 模型をつくるためのグループづくりをし、調べる計画を立てる。 ・ 見学をして調べ、自分の調べたところの設計図をかく。	学活：正しい道路の歩き方、横断の仕方(1) 進んで決まりを守り、安全に行動できる態度を育てる。
7		・ みんなが望んでいる相引川についてのアンケートづくりをし、まとめる。 ・ 見学したことや、インタビュー結果を取り入れて設計図を修正する。	
9	音楽：おまつり(4) 音楽を作って表現することができる。 体育：たんけん(5) 特徴がよく分かるように動きを工夫し、仲よく楽しくおどることができる。	・ 表現活動をする。 ・ 子ども相引川音頭をつくる。 ・ 模型づくりをする。	道徳：ひょうげまつり(1) 郷土の文化や伝統に親しみ、郷土を大切にしようとする心を持つ。

○ 単元の設定

1年の生活科では、学校探検マップを作成する。2年では、地域シリーズ学習「古高松探検マップをつくろう」で地域を実際に歩いて探検したり、インタビューや聞き取りの体験を重ねて地域に住む人々の気持ちや願いを考え、自分たちの町のよさに気付いてきている。3年では、こうした内容を発展させ、「きれいで、みんなの楽しめる相引川の模型をつくろう」という目標を設定する。

○ 単元の展開

まず、課題選択により、「公園づくり・遊べる川・美しい橋・魚や生き物の住める川」など自分が調べたい場所を決める。地域の人から昔の様子や歴史を聞き、その上、行政面でも「水辺整備計画」が進められていることを知って、設計図の修正に意欲的に取り組む。

子どもたちは、模型の公園を製作しながら、この川べりで夏祭りを楽しむことを発案する。みんなで「相引川音頭」を作詞し、振り付けを工夫して運動会で発表し、好評を博す。模型が完成した1月には、県の河川課からも来てもらって発表会を開き、子どもの立場から提言をする。

この展開から、前述した発表機能、研究機能、情報機能、そして提言機能の発揮へと地域における学習拠点としての働きを具体化することができ、学校から地域への呼びかけを試みることができた。この1年間にわたる教科・道徳・特別活動の三領域を総合した継続的な学習の展開には、調べる、設計図をかく、文を書く、音頭をつくる、リズムをつくる、踊る、立体模型づくりなど多様な表現活動が組み合わされている。選択のある表現活動は新たな課題と発見の喜びを生み、学び方を身に付けていく。

- ◆ 単元の展開に当たって配慮したことは、①子どもがもつ課題意識を大切にし、一人一人がねらいをもって学習が進められるように配慮し、学習意欲を育てること、②子どもの側からの基礎・基本とは何かを考え、子どもが自らの力で身に付けていくものやその子どもの自己実現に役立つものを学び取らせ、生きて働く力を育てる活動とすること、③活動や体験を重視して子どもの興味・関心を生かし、自発的・自主的活動を大切に、「よさ」を自覚し伸ばすように支援したことである。

IV 考えてみたいこと

こうした地域学習における体験学習を通して、感性を磨き、生活の知恵や技能を身に付けていく。また、多くの人とのふれあいがある生きた「社会の学校」での学びは、生涯にわたって学び続ける能力を培うとともに人間としての生き方・在り方を考えさせてくれる。学習成果をまとめて発表した感動は大きい。これからの高齢化社会における教育の在り方ともつなぎたい。

生活科から総合学習へとつないだ実践を重ねて課題であった地域に開かれた学校づくりへの推進を「ふるさと活動」という体験を軸とした「地域学校プラン」の編成によって具体化することができたと評価する。家庭や地域社会とともに子どもをたちを育てる場、地域の人々との学習・交流の拠点としての在り方についても、さらに、視野を広げていきたい。

改めて、三領域を総合する課題と体験の軸をもつ総合学習の展開は、環境教育・情報教育・国際理解教育などの推進、ボランティア活動、地域行事への参加など学校課題に直結した構想を描くことができる。今日的課題への対応も含めて特色ある学校づくりを推進することができる。

実践を重ねて、「これからの学校教育の目指す方向」としてあげられている「一人一人の個性を生かすための教育改善」「横断的・総合的な学習の推進」「教科の再編・統合を含めた将来の教科等の編成の在り方」にかかわるいくつかの具体的方策を手にすることができた。

生涯学習社会の構築に向けて、「生きる力を育てる」という命題を見据えて、地域学校としての実践をさらに積み上げていくことが課題である。

(附記 本稿は前任校高松市立古高松小学校での実践をもとにしたものである。)